

第二章 生命を奪うもの

このように尊い人の生命を奪うものは何でしょうか。

佛教の開祖、古代インドの釈迦牟尼は、「人間」が自ら選択することができないもの、逃れられないものは「生老病死」であり、人がその一生で背負う「四苦」と説きました。

生物としての人間は、子孫を残す営みの中で「生」を受け、歳を重ねて「老い」、やがて、自然界の法則に従って、「死」を迎えます。「生」から「死」までの歳月の間には、肉体を「病」が蝕むことがあります。肉体だけでなく、心(精神)さえも、「病む」ことがあります。この「病」がほとんどの人間の生命を縮め、寿命を全うする前に、「死」に至らしめるのです。

母の胎内を出た瞬間から、たかだか一〇〇年前後の寿命を日々カウントダウンし、時に「病」に冒され、歳を重ねては「老い」を憂い、やがて「死」を迎えなければなりません。

貴賤、貧富の境遇に関係なく「死」は必ず訪れるのです。

人は、この「生老病死」の四苦から逃れられないのだと、お釈迦様(釈迦牟尼)は諭したのです。

人間の生きている環境が、古来、夢想されてきた「ユートピア(理想郷)」ならば、総ての人々がその寿命を全うできるかもしれません。

しかし、現実の世界は、これを許さないのです。

何故なら、寿命以外に、人の生命を奪うものがあるからです。

まず、大自然が引き起こす災害があります。

自然の破壊力の前で、人間は無力なのです。

人類は、地上に足跡を残した、その日から、火山噴火、暴風、豪雨(洪水)、地震、落雷等の自然災害に怯えながら暮らしてきました。ひと度、自然災害が発生すると、その猛威から逃げ惑い、不運ならば生命を奪われました。本来、全うすべき寿命を、老若に関わらず、途中で断絶させられるために、また、人力

ではこれを防ぎきれないために、自然災害を恐れたのです。科学が進歩した現代においても、巨大な自然災害に対して、人は無力だと云わざるをえません。

無数の火山帯が走り、海底プレートが交叉する特殊な地域に、弓なりに横たわる日本列島では、火山噴火や地震のために、古来より、人命が奪われてきました。また、南方海域の熱帯性低気圧から発達した台風が毎年襲い、その風水害によって人命が失われてもいます。

これら自然災害による人命喪失は、過去から現在に至るまで、毎年々々、繰り返されてきたのです。

次いで、病気が人の生命を奪うのです。

病気に関する知識に乏しく、治療の手法さえもなかった古代人の世界では、眼には見えない神秘の力に縋り、祈るしかありませんでした。神に仕えるシャーマンの霊力が、病気に対する唯一の救いだったのです。

その後、人類が進化するに従い、病気に関する認識とその対処療法の知識とは拡大し進歩しましたが、今日に至るまで病気による死者は後を絶ちません。特に、世界規模で流行する伝染病による被害は極めて大きいものです。

明確に記録が残る伝染病被害としては、一三四八年、西欧を起点に大流行したペストによるものがあります。「黒死病」として恐れられたペストは、当時の西欧、中東地域で住民の三分の一から生命を奪いました。

また、一九一八年、米国、欧州から広まったウィルス性感冒(通称「スペイン風邪」)では、全世界約十二億の人口(当時)の四%強に相当する約五〇〇〇万人が病死したとされます。このウィルス性感冒は、特に、インドで猛威を振るい、一九一八年十月からの三ヶ月間で約二〇〇〇万人が死亡しています。我が国では、流行した一八年からの三年間で約三九万人が死亡したのです。

人類の病気との闘いは、医療科学の進歩とともに、過去には不治の病とされた結核をはじめ、天然痘・発疹チフス・猩紅熱・流行性脳脊髄膜炎・日本脳炎等々の伝染性疾患を封じ込めてきましたが、今日においても、致死率の高い病気が存在しています。

完全根治が難しい「癌」だけでなく、一九七六年、スーダンで発生したエボラ出血熱、一九八一年に症例が確認されたエイズ(HIV)は、未だに確かな治療薬が完成しない状況にあります。

これらの病気に対して、日々進歩している医学は、いずれ有効な治療薬を人

類に与えるかもしれません。

しかし、病原となるウイルスも常に変異を繰り返しており、将来、世界的流行（パンデミック）が危惧される毒性の強い「新型インフルエンザ」に対する不安は解消されないうままなのです。

このように、病気は人間の生命を縮め、本来、全うすべき個人の寿命を途中で阻害するのです。

続いて、人為的な事故や犯罪が人命を奪います。

二十世紀を通して発達した陸上交通・海上交通の手段、その中でも特に、自動車・航空機による移動は、人類に利便性を付与した反面、日々の生活に「時間」と「速度」とを競う新たな文明を持ち込みました。その結果、それまでには無かった新たな交通事故が多発し、その死者は年々増加していったのです。

我が国の交通事故死亡者は、近年減少傾向にあるものの、二〇〇九年度、四、九一四人（警察白書二〇一〇抜粋）数えています。

更に、近年、個人を取り巻く情報が氾濫し始めたために、社会生活における人間関係が複雑化して、新たな犯罪が多発するようになりました。

社会共通の情報は、従来、新聞・ラジオ・テレビ等の報道機関を通してのみ入手されていたのですが、二十世紀末、PC（パソコン）や携帯電話が個人の生活領域にまで急速に拡大すると、多種多様な情報が個人にとって、より身近で、より安易に、入手できるようになりました。

この結果、個人を取り巻く情報は過多となり、一人ひとりの能力の違いと相俟って、情報を分析、処理する上で千差万別の状態を呈し始め、情報に対する理解度の落差が人間関係をこれまでよりも、むしろ複雑化させたために、対人関係に起因する犯罪が後を絶たない状況を呈しています。

これに加えて、我が国においては、先の太平洋戦争（開戦前の閣議決定呼称は「大東亜戦争」）に敗戦後、六十有余年に亘る教育の混乱が「道徳心」までも低下させたために、新たな犯罪を助長してもいるようです。

教育界が混乱した背景には、戦前の「滅私奉公」教育の反動として、戦後に導入強化された「個人尊重」教育を、一部の現場教師がその目的を意図的に歪曲して、個人の主張・権利ばかりを重視する教育に偏向させたことが大きな原因になっていようです。この偏向教育思想に凝り固まった一部の現場教師によ

る指導は、生徒に「利己主義」を育ませる結果を生み、この歪んだ戦後教育を受けた若年層の間に、「権利」を主張するばかりで、本来、国民の立場で果たすべき「義務」と「責任」とを軽視する風潮を醸成してしまいました。

幼少時から「利己心」を偏重・増長されて育った世代は、「公共心」を著しく軽視します。

この社会的に殺伐とした傾向は、「自己中心的」な犯罪の温床となつて、自らの不遇を他に転嫁して憚らない、無差別通り魔殺人さえ連鎖させるようになってしまったのです。

この自己中心的な「道徳心」の乱れは、日本社会を根底から支えていた長幼の秩序さえも崩壊させる傾向にあり、生きていく「絆」であるべき家族の間ですら、親殺し・子殺し等の尊属殺人が根絶されないのは残念の極みです。

我が国の殺人犯罪件数は、二〇〇九年度、一、〇九四件（犯罪白書二〇一〇抜粋）です。